旧巨椋池周辺の仏像

井上　正

このレポートは、京都市南郊のごく狭い地域に関するものである。この一画は巨椋池とそこに集まってくる多くの河川にはさまれた低平湿潤の地で、古くより微高地に小集落が形成され、農耕を中心とする生活の営まれてきた地域である。河岸や洲の要地には小さな舟着き場が発達し、また水辺の萱は、宮中御所の屋根の料として、住民の生業の一部ともなっていたという。

こうした地域は一般に高度の文化が根づく土地柄ではなく、有形の文化は遺りにくい。生活文化のすべては消耗品として湮滅して痕跡をとどめず、古記録の遺ることも稀であって、古い時代のことは尋ねようにもすべがないというのが実情であろう。

しかしながら、今回の仏像調査では、この狭い地域に予想以上に数多くの古い作例が遺っていることに驚かされた。方六キロメートルほどの広さのうち、半ばは游水池が占めていたのであるから、文字通りの小地域である。これら作例の大部分は寺院の統廃や神仏分離などによって、当初の安置場所が変っているものが多いが、それも集落内である場合が多く、また集落を離れる場合でも、比較的近距離である場合が多かったようである。したがってこれらの遺例は、この近辺の古代・中世の歴史をものがたる唯一の「生き証人」ともいうべき伝世の資料である。こういった地域調査は単独ではさほど意味がないが、同様な密度で、ひろく周辺に及ぼされてゆく時、新しい価値を帯びてこれらの資料が再登場するという性質のものであろう。

本稿は従来編成されている彫刻史を参照しながら作例を扱うことにより、他の分野への資料提供をおこなうことを主眼とするもので、個個の作例がいつの頃に造立され、おおよそどのような位置を占めるものであるかを報告することを目的とする。その意味ではより精細な報告形式が望ましいが、それはまた調査がより広く進んだ段階にゆずり、ここではとりあえず概略を記すにとどめた。

作例は十四世紀以前のものに限定し、破損仏や修理によって原容を大きく損じているものをも対象とした。近年小地域の文化財調査報告の中には有用なものが多くなったが、調査範囲が行政上の小単位に分断される場合が多く、また必要な写真資料が量質ともに不備であったりして、基本資料としてはなお充分とはいい難い面がみられる。今回はさいわい、調査については伊東史朗、斉藤望の両氏、

写真撮影については金井杜道氏の協力を得ることができ、筆者としては一応納得のゆく資料をもとに、レポートすることができた。三氏の労苦に対して心から御礼申し上げたい。

一

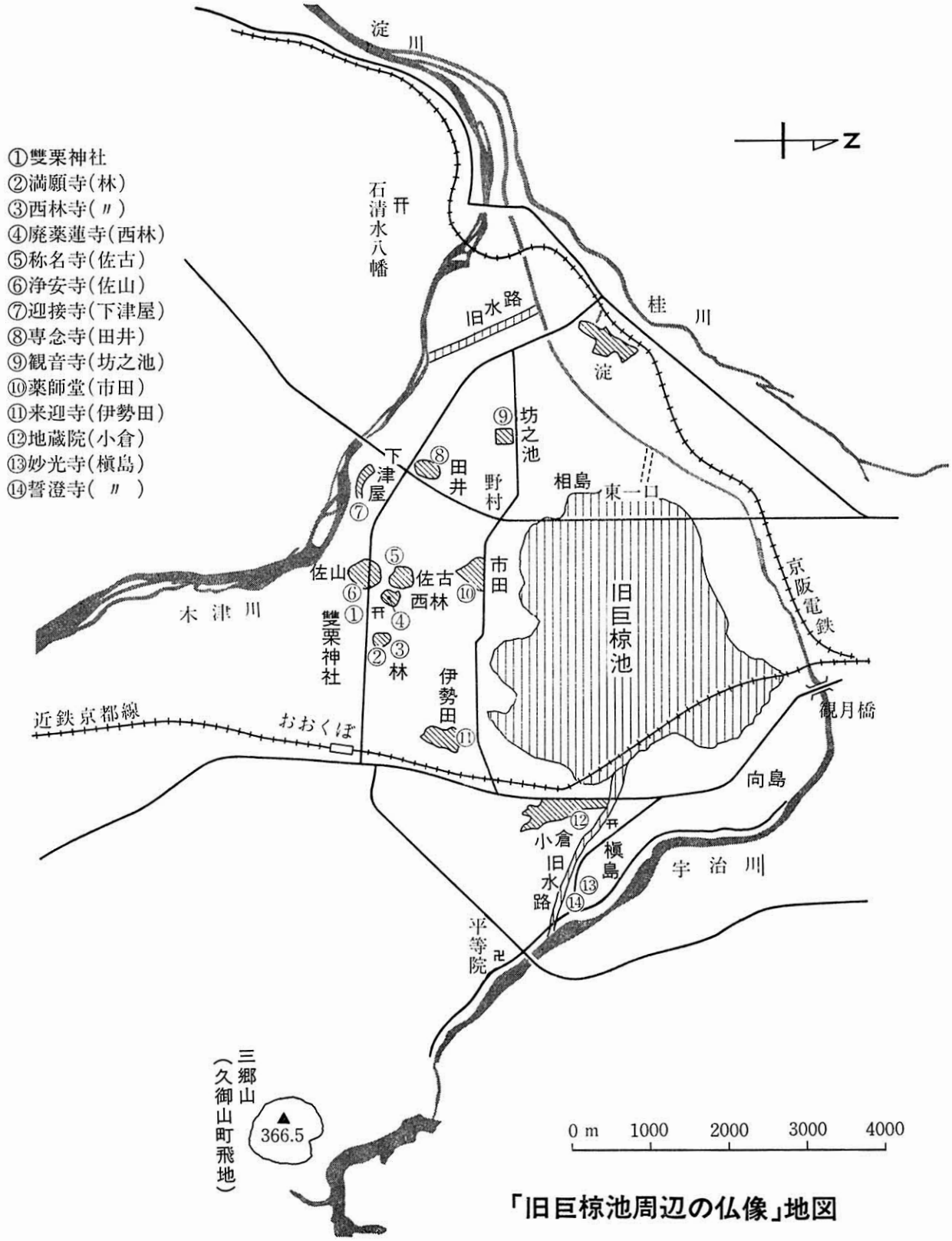
京都市の南方、近鉄京都線が市街地を過ぎ、宇治川にかかる観月橋を越えるあたりから、京都盆地としては最大の田野がひらける。このあたりが旧巨椋池の干拓田である。以前は森を擁する古い集落が池の跡地をとり巻くように点在し、都市の近郊とは思えぬような田園風景をくりひろげていたが、工場・倉庫および住宅の進出、バイパスの設営などによって急激に都市化が進み、その田園的な風趣は半減した。

後にも触れるように、この地点は宇治川、桂川および木津川という、近畿の三大河川が合流する低湿地であり、巨椋池はそこに生じた水深の浅い大遊水池であった。古く桂川が池と離れ、ついで木津川が西の方（現在の位置）へ流れを変えて池と切り離され、宇治川のみとなったが、その宇治川も秀吉の伏見築城に際しての大改修で、現在見るように大きく東へ迂回させられ、出水の時だけ遊水となって池と通ずるだけであった。

河水の氾濫はしばしば周辺の近域に水害をひきおこし、長雨ははけ口のない地域に冠水の被害を及ぼした。したがってこの地域の住民は、高燥の地に較べて遙かに厳しい生活条件を強いられてきたのである。奈良と京都を結ぶ主要な陸路が、この沼沢池を避けて東西に大きく迂廻したのも当然である。宇治川の宇治、淀川の橋本は、ともに川幅の狭い所で、この二点が渡河の要衝となった。陸運にとって巨椋池が大きな障害だったことはいうまでもない。

一方、近世以前において、交通・運輸における河川の利用度は現在とは比較にならないほど高かった。舟や筏による水運は、河川流域の要所に小さな川津を発達させた。旧巨椋池周辺に港津であったことを示す地名が数多く遺っているのもそのことを物語っている。久御山町の生津、下津屋および対岸の上津屋などはその一例である。

すでに記したように、このような湿潤の低地に高度の文化が根づくことは稀である。仏教に限って考えると、宗派の本山またはそれに準ずるような大寺は、都のなかや山岳・山麓、あるいは主要な道路の近くに建立される。周辺に眼を向ければ、醍醐寺・三室戸寺などのような大寺は枚挙に遑ない。このほかは、水辺の勝地に営まれた貴族の別業を寺とした平等院などのような場合もある。しかしながら、この地域は、一部を除いてそのいずれにも属さない凡庸の土地である。至近の距離に天台、真言などの古い寺々を望みながら、ここにはまた別の類型に属する生活があったといえる。寺院は神社とともに、集落または小地域の宗教的な中心をなすにとどまり、それ以上のひろがりはもたなかった。しかしながらこの地域にはきわめて古いころから農耕生活があったらしい。古墳時代以前の状況については遺物の包含層がかなり深いので正確なことは現在わかっていないが、奈良時代の条理制の痕跡は遺構ならびに地名として歴然と遺っており、それ以前からあった集落と、条里制の区劃にあわせて新しく営まれた集落とは地図の上ではっきりと区別することができる。集落は土盛りを行った微高地によって水を防ぎ、さらに中世には環濠集落をなしていたらしい。(注1)



「旧巨椋池周辺の仏像」地図

このような古代以来余り変っていない農村の生活においても、生活財のほとんどは消耗し湮滅してしまう。結局変化しながらも遺ってゆくのは口碑・習俗であり、〝もの〟としては仏像または神像が唯一の伝世品となる。そのうち神社の御神体の調査は今日なお困難な問題を含んでいるので、知り得る唯一の資料が仏像であるという場合が多い。しかしながら、隠れた遺例の数に対して調査は立ちおくれており、この貴重な「生き証人」を資料として文化史の中に活用するのは、なお今後のこととといわねばならない。

二

ここで取り扱う地域は久御山町のすべてと、宇治市西部および伏見区の一部である。旧巨椋池の北辺を除く三方、近世の村名でいうと御牧・佐山・小倉・槇嶋・向嶋の五ヵ村で、すでに記したように古い仏像が数多く残っているようにも思えないところである。久御山町林の西林寺に半丈六仏三軀、同じく佐古の称名寺に重要文化財に指定されている半丈六仏があることはすでに知られていたが、その周辺にどのような作例が遺っているかは知る由もなかった。さいわい昭和五十一年に久御山町郷土史学会によって『久御山町の社寺』なる一本が刊行され、これにかなり多数の仏像の写真が掲載されたので、おおよその見当をつけながら調査を能率的にすすめることができた。また本書の特色は個人所蔵の『社寺明細帳』（江戸時代）などにもとづき、廃寺となった多数の諸寺をもとりあげて叙述していることで、この地域の歴史研究にとって必須の基本的知識を提供している。(注2)

この調査はなお全容を報告するところまでは進んでいない。おそらく七・八割あたりというところであろう。いずれ機会を得て補訂をおこなうことを前提に、本誌をかりて中間報告をさせていただくこととした。

三

一般に特定の小地域に遺る仏像をどういう順序で記すのがよいか――地域別、時代別、またはとくに宗派的特色が顕らかな場合は宗派別など、種々の記述が考えられるが、本稿は古い作例の遺存している現状を知ろうというのが第一の目的であるので、いちおう地域別によることとし、何らかの歴史地理的なまとまりを考えることができるものについては、多少特別に扱った。

一　雙栗神社とその周辺

雙栗（さぐり）神社の周辺にある集落の寺院には、数多くの古仏が遺っている。つい最近まで、神社は田園の中の孤立した森で、約半キロメートルづつ離れて、東に林、北に西林、これにつづく西北に佐古、そして西南に佐山と、四つの集落がこれを取り巻く景観がみられた。神を中心とする農耕生活の古い単位形式が、生きたままで現在に及んでいる姿を目のあたり見る思いがする。

雙栗神社は宇治田原に「三郷山」と呼ばれる宮地をもっている。標高三六六・五メートルの山で、地図には久御山町飛地とされ、その由緒についてかねてより関心をもっていたが、最近これについて森一修氏の興味ある考察(注3)のあることを知った。

以下森氏によると、「三郷山」の飛地（大字佐古小字梶石飛地）は古来雙栗神社の宮地で、佐山・佐古・林三郷の共有するところであった。延宝四年（一六七六）の奥書をもつ『極本八幡宮縁起』（佐山・中初栄氏蔵）[注2]によると、三郷村の東二里ばかりに遙拝所があり、俗に御旅所といい、この山一里四方は古くより年賦がなく、国守・地頭といえども侵すことのできない聖域であった。仁平二年（一一五二）に如一上人が八幡宮神輿の御正躰を造立し、以後遙拝所への御神幸が始ったという。一方、宇治田原には、御栗栖神社、雙栗神社（雙栗天神社とも）、雙栗寺跡など「栗」の名のつく社寺があり、昔田原郷は雙栗ノ荘ともよばれたという。この宇治田原・雙栗神社は田原郷屈指の古社で、一宮・三宮・大宮の三社はいずれもこの社の祭神を勧請分祀したものといい、戦前まで有名であった田原祭（別名三社祭または三郷祭り）の神幸は三郷山の近くの「くつわ池」でおこなわれた。一方、久御山・雙栗神社の神幸が三郷山に対しておこなわれたことは先述の通りで、両者は神の降り立ち給う山とそこから流れ出る水を湛える灌漑用水池という一連の本末の関係にある。御旅所とは俗称で、本来は、聖なる山に降臨する神を迎えにゆくための神幸と考える方が自然であり、異なった二つの地域から同一神を迎えにゆくことを意味するものではないかとされた。この推測をさらにおし進めれば、両者の氏子の祖先はもともと一つの氏に属していたものと考えられ、久御山町の三郷はある古い時期に宇治田原から分村移住し、その地に社地を新たに定めたが、神迎えは以前と同じ故地に対しておこなう慣例が永く伝え遺されてきたものとした。一般にこのような考察は氏子と氏神、氏神と農耕生活、祭祀と神幸などの基本的な関係の上にのせて始めて説得力をもつもので、他の多くの事例や近隣の神社の場合ともつき合わせながら考えることが必要であるが、久御山・雙栗神社の最初の成立を考える上ではかなり示唆に富む見解ではないかと思う。

その後、西方に望む男山の八幡神を勧請して、極の大木にちなんで極本八幡宮と称したらしく、『縁起』によれば、清和天皇貞観の初、行教上人にしたがって男山に宇佐八幡の神祠を建立した紀州熊野の神職木工頭橘良基は、この三郷の静境を愛して村邑を構え、のち天治二年（一一二五）にいたって男山より八幡神が勧請されたという。古い雙栗の氏神の上に八幡神が乗っかる形となり、やがて応保二年（一一六二）二条院祈願に際して勲一等を授け、極本一品八幡大菩薩と号し奉ったといい、八幡神の威光が古くからの氏神に及んでゆく一例をみることができる。

また三郷の村裏にはそれぞれ神宮寺があった。『縁起』および『山州名跡志』（元禄十五年・一七〇二）には佐山の三箇寺（西方寺・三福寺・浄福寺）と林の二箇寺（薬蓮寺・安楽寺）の計五箇寺を記し、『興福寺官務牒疏』（嘉吉元年・一四四一）では佐山の浄福寺と林の二箇寺とをあげている。

現在の状況と較べてみると、雙栗神社とそれをとりまく集落の様相は、ごく最近まで、中・近世の状態をほとんどそのままにのこしてきたようである。そして大変興味をそそられるのは、現在遺っている仏像についても同様のことを指摘することができるように思われる点である。

まず『縁起』を主として記録に見える仏像をあげてみよう。

西方寺（佐山）　阿弥陀如来立像　二尺一寸　定朝作（『山州名跡志』・

『拾遺都名所図会』は坐像とする）

三福寺（佐山）　薬師如来坐像　三尺一寸　恵心僧都作（『山州名跡志』作不詳とする）

浄福寺（佐山）　観音菩薩立像　安阿弥作　（『山州名跡志』は「二尺許」と記す）

薬蓮寺（林）　薬師如来坐像　三尺五寸「定朝之真作」（『山州名跡志』は立像とする）

安楽寺（林）　薬師如来立像　四尺二寸　行基作（『山州名跡志』は坐像とし、作不詳とする）

次に現存する古い作例を寺別に列記してみよう。

西林寺（林）

薬師如来坐像　像高一四二・〇センチ

阿弥陀如来坐像（定印）　像高一五二・五センチ（昭和四十五年京都国立博物館へ譲渡）

阿弥陀如来坐像（来迎印）　像高一四〇・二センチ（右に同じ）

銅造釈迦誕生仏像　像高一一・四センチ

（以上何れも西林の廃薬蓮寺より明治四年に移安）

満願寺（林）

薬師如来坐像　像高一〇三・〇センチ（現在客仏、明治には本尊であったという）

称名寺（佐古）

阿弥陀如来坐像　像高五四・六センチ（近世日野の里より移安したものと伝える）

大日如来坐像　像高八九・三センチ（もと廃東明寺の本尊）

薬師如来坐像（重要文化財）　像高一三八・〇センチ（もと林・廃安楽寺の旧仏）

浄安寺（佐山）

観音菩薩立像　像高一四三・〇センチ（もと佐山・廃浄福寺の旧仏）

以上九軀の現存作例のうち、前掲の文献に該当すると思われるものはわずかに、廃薬蓮寺薬師如来坐像、廃安楽寺薬師如来坐像および廃浄福寺観音菩薩立像の三軀に過ぎないが、少くとも『山州名跡志』の著された元禄十五年（一七〇二）以後に、他の六軀が遠方より移安されたとは考えにくく、多少の移動は予想されるにしても、多くはこの三郷内に祀られてきたものであろう。何れも平安時代後期、十世紀の末から十二世紀に至る時期の作例ばかりで、鎌倉時代の作例は見出すことができなかった。この東西二キロメートル、南北一キロメートルの小地域にみられる藤原仏分布の密度は驚くべきものがある。しかも廃薬蓮寺の旧仏三軀と称名寺の薬師如来坐像および満願寺の薬師如来坐像は、何れも半丈六の坐像で、実に五軀の大型像が密集して遺っていたわけである。

筆者はすでに別稿で廃薬蓮寺の旧仏三軀について触れる機会があったが[注4]、その後の調査で、旧薬蓮寺像にさらに深い興味をもつようになった。

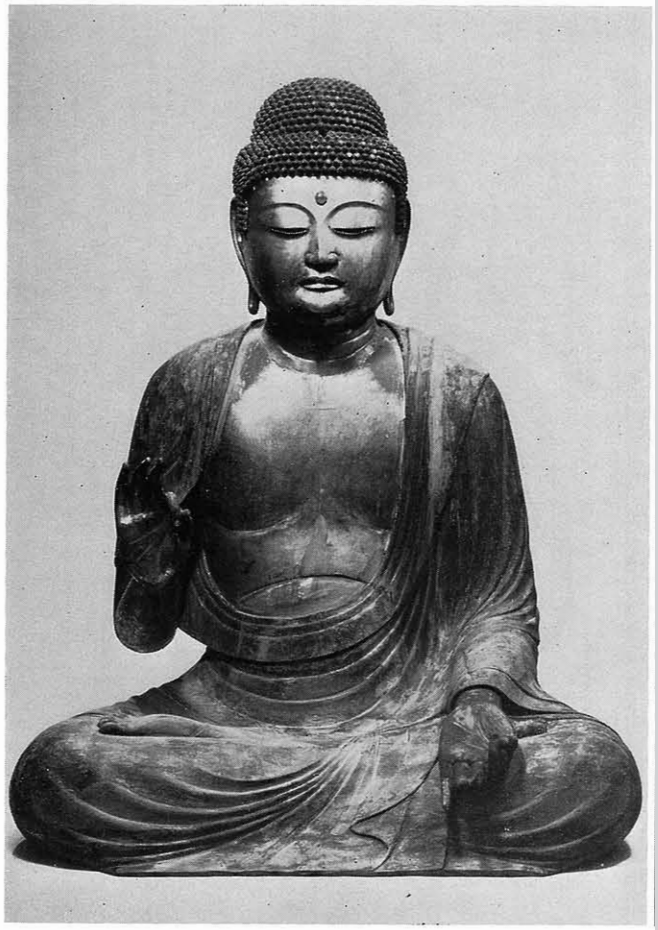
西林寺、称名寺および満願寺の三軀の薬師如来像は、いずれも左掌上に薬壺を載せ、右手を施無畏印とする通形のものであるが、両膝の中央部にせり出してくる前掛様の衣端部、左足裏の半ばを覆って前方へ流れる三枚重ねの衣の設定など、細部を除いてはきわめてよく似ている。しかしながら、作風の上では三者三様で、なかでも西林寺像がもっとも古様を示している。体部から両膝にかけてかなりの量感があり、胸乳線を二重に表しているのは、胸腹部のくびれが

1　菩薩形坐像　迎接寺（下津屋）

3　十一面観音立像　妙光寺（槇島）

2　薬師如来立像　妙光寺（槇島）

——別図I——



5　阿弥陀如来坐像(来迎印)—西林寺伝来—京都国立博物館

4　観音菩薩立像　浄安寺（佐山）

7　阿弥陀如来坐像　妙光寺（槇島）

6　阿弥陀如来坐像(定印)—西林寺伝来—京都国立博物館

——別図II——

8　薬師如来坐像　称名寺（佐古）

10　大日如来坐像　称名寺（佐古）

9　薬師如来坐像　満願寺（林）

12　阿弥陀如来立像　誓澄寺（槇島）

11　観音菩薩立像　誓澄寺（槇島）

13　薬師如来坐像　妙光寺（槇島）

平板となり形式化したものとみられ、一般論として古式といえる。眼が小さく、眼尻を遠く引かないのは、仏師定朝の父康尚の時代に多く用いられた表現であり、一般的な「定朝様」の仏像の表現としては異色である。一方全体の安定した比例のとり方や、各部の円満な膨らみをもとにまとめ上げている点は定朝晩年様式への模索の一段階を思わせるものがあり、本像の製作はほぼ十一世紀前半期、定朝活躍期の頃と考えられる。本像の作者をただちに『縁起』にいう「定朝之真作」とすることは困難であるが、天喜元年（一〇五三）の鳳凰堂阿弥陀如来坐像を典型例とする定朝晩年期よりも、一段階前の様式と考えることに異論はなかろう。図版四・附表⑧ 他の二像はいずれも西林寺像を典拠にして造られたものと想像される。称名寺像では、細かい衣文線の設定に至るまで西林寺像に倣ったことをありありとうかがうことができる。藤原時代の末期の作であるが、やや小ぶりにしまった感じの頭部と、衣文の滑りがちな早い流れなど、いわゆる定朝様の静的な表現からは一歩踏み出している感じがあり、むしろ十二世紀後半頃の作と考えられよう。側面観において、体部が厚く、猫背で頸太く、顔をやや前へつき出しているあたりにも同様な感じがある。別図Ⅲ8・附表⑮ これに対し満月寺像は、全体に作風が硬く、衣文は浅く線的になり、膝前の前掛様の部分に小さな折り返しをたたむなどの点に異なった点は認められるが、髪際線を直線に、眼を小さく表わす面相の特色や、各部の衣文設定などに共通点が多く、西林寺像との原模の関係はここでもかなりはっきりと感じとることができる。別図Ⅲ9・挿図1・附表⑯

以上の三軀は当初どのような位置関係で安置されていたものであろうか。西林寺像がもと西林の薬蓮寺に、称名寺像がもと佐山の安楽寺にあって、それぞれ雙栗神社の北方と西および西北の各郷に存したことを思えば、明治期まで本尊として祀られていたという満願寺像は東方に当る林の集落にあったものかも知れない。おそらく十二世紀の末になって、三郷の各郷はそれぞれに本地薬師如来像をもつようになったのであろう。そして、雙栗神社を中心として存続していた三郷の共同体意識が、旧薬蓮寺像を根本像として同形同大の本地仏を造らせることになったのではないだろうか。前に紹介した森氏の飛地に対する考察は、三郷の先祖が東方の高地から移住してきたことに結び付いていったが、この三軀の薬師如来像も移住者や開拓集団のもつ連帯感が尾を引く固い結合を示しているようにも思える。果して造立当初、三郷のそれぞれに安置されていたものかどうかは確実ではないが、ここでは中世の文献や現位置などを合せ考えて、古代の三郷に根づいた薬師如来像と考えたい。

いうまでもなく、以上のような原作と模作の結び付けにはかなり

1　薬師如来坐像　満願寺（林）

主観的な要素の混ることが多い。また近世以前の仏像における模作は、西欧において古くローマ時代からあった正確なコピーとは本質的に異なるものがあり、一般的にもっとゆるやかなものである。原作に対する忠実度は作者の態度または製作時の条件によっても大きく変る。形式上の特色を写しとることに限られる場合もあれば、様式上の模刻にまで及ぼうとする場合もある。また、新しい創作活動の契機として古例にその範を求める場合もあり、この場合に原作・模作という言葉は余り適当ではなかろう。こうしてごく特殊な例を除き、原作・模作の関係は、時代様式や作者の個人様式と関係しながら表れているとみるべきもので、作者の模作への関心度と自己様式の積極的な主張とのかかわり合いの如何によって、模作という言葉の使い方を限定すべきであろう。そしてさらに、注文者である僧侶・檀越などの性格や、地域的な点を加味して原模関係の絆が探られてゆかねばならない。

西林寺薬師如来坐像（旧薬蓮寺像）のこの地域における根本像としての役割は、さらに広げて考えることもできる。今回対象としている地域からはわずかに外れるが、宇治市五箇庄の蔵林寺にある薬師如来坐像や、これとよく似た表現をもつ同寺阿弥陀如来坐像がそれである。前者は男性的な相貌で衣文は太く、後者は対照的に女性的で優雅な趣があり、藤原時代後半期の中でも多少年代差があるように認められるが、全体の体型のとり方や膝前の前掛状の形式と両足部の衣文の扱いなどには、西林像に通ずる点が感じとれる。後者は尊像が異なるので除外するとしても、地域的な近さからすると、この原模関係もあり得ないことではない。もしこの例をも加えて考えると、西林寺像の波紋は三郷に限られることなくさらに大きく広がることになり、藤原時代後半期に旧薬蓮寺像は薬師如来の伝定朝仏としてこの地域で名高い像であったことも想像されてくる。近辺に宇治平等院鳳凰堂像や日野法界寺像（今亡）、また西京西院の邦恒朝臣堂像など、後世の手本となった定朝作の丈六阿弥陀如来像がその円満な相好をひろく讃えられているなかにあって、半丈六薬師如来像としてこの狭い地域とその周辺に、限定された影響力をもっていたのではないかということも想像されてくる。

いま、蔵林寺像の根本像を強いて旧薬蓮寺像に求めなくともよいが、藤原後半期の比較的単調な様式展開のなかで、一種説明がつかないような特色をもつ作例に逢着する時、このような原模関係を想定することによって、多少は納得し得るような説明が得られる場合もあるのではないだろうか。先述のように、確定的な判断はなかなか困難であるが、いま思い当る二、三の例をあげてみよう。

㈠　浄瑠璃寺薬師如来坐像（長和二年・一〇一三東小田原寺の本尊として造立、のち西小田原寺に移安。別説永承二年・一〇四七）――――高田寺薬師如来坐像（保安　年・一一　台座墨書銘）〔高田寺は浄瑠璃寺の西北約二キロメートル〕

㈡　海住山寺十一面観音立像（本尊。九世紀頃）――――法泉寺十一面観音立像（平安時代後期）〔法泉寺は海住山寺の西方約二キロメートル〕

㈢　神護寺薬師如来立像――――亀岡・国分寺薬師如来坐像（平安時代後期）〔国分寺は神護寺の西北方約八キロメートルにあり、中世神護寺との関係が深かった〕

地域的には、いずれも原本像が山上または高地の古寺にあり、第二次像が山下にある。距離的には二キロメートルないし八キロメー

トルくらいで、尊像名はいずれも同じであるが、㈡については上半身のみの作風について類似が認められ、㈢は神護寺像が立像、国分寺像が坐像であるから、腹部より上の上半身についてのみである。このような想定の上で第二次像の表現を解釈すると、その特異性が多少納得できるように思われるのである。さらにこの見方を広げれば、わが国のような他国からの将来品や渡来工人をもととして展開した仏教美術は、当然のことながら地域性をも含む複雑な原模関係の図式の上に構成さるべきものともいえよう。一概にはいえないが、第二次像において創作性が乏しいような作例については比較的この関係を指摘し易く、次代を拓いてゆくような個性豊かな作家の作品については、かなり深い洞察が必要となるであろう。

二　林・佐古・佐山

旧薬蓮寺の本尊薬師如来坐像とその模像と思われる二軀の半丈六薬師如来像をとり上げ、神社を中心とする地域の強い結び付きが仏像の遺例の上にもうかがわれる点について触れたが、続いてその他の作例を列記することとする。

林の西林寺には三百メートルほど西にあった廃薬蓮寺から薬師如来坐像（半丈六）とともに明治初年に移された像が他に三軀あった。

銅造釈迦誕生仏立像（像高一一・四センチ）は、本体を仰蓮と共に一鋳としたムクの銅造で、右手を敬礼風にあげている。肉髻大きく面幅の張った円満な面相に表され、肉身・衣文もともに藤原風である。銅造釈迦誕生仏の中で、藤原風をこれほどはっきりと表している例は現在他に見当らず、貴重な一例である。[挿図2・附表⑪] 半丈六阿弥陀如来坐像（定印・現在京都国立博物館蔵）は、腹部を伸ばして坐高を高く、膝張を充分とった、伏し眼・撫で肩の像で、一般的な定朝様彫刻に較べると、かなり個性的で、伸びやかな形姿の中に安定感を構想している。衣文は自由で型に嵌まっていない点はよいが、反面如来像に欲しい整合感には欠ける。十一世紀中葉の定朝様の系列の中で一つの模索の過程を示すものと考えたい。[別図Ⅱ6・附表⑨] 他の半丈六阿弥陀如来坐像（来迎印、現在京都国立博物館蔵）は、対照的に頭部大きく膝張を小さく、衣文を大まかに整えた男性的な大らかな作風で、頭部の円満さを強調するこのようなプロポーションは、藤原彫刻における一つの流れとして存続した。十一世紀の末から十二世紀にかけての頃のもので

2　銅造釈迦誕生仏像　西林寺（林）

あろう。附表⑫ 以上のように西林寺に伝来した旧薬蓮寺像は、いずれも藤原彫刻史上重要な意味をもつもので、いわゆる地方的作風に類しない点、この地域では特異な位置を占める。

佐山の称名寺には、本稿が取り扱う地域で唯一の重要文化財である薬師如来坐像のほかに、二軀の藤原仏がある。本尊の阿弥陀如来坐像（像高五四・六センチ）は近世に巨椋池の対岸、日野から移されたと伝えられる像で、体部の表現はやや無骨で地方的であるが、童顔の相貌は康尚活躍時代の諸像、例えば真正極楽寺阿弥陀如来像や浄慶寺阿弥陀如来像などに通ずるものがあり、よく当時の都ぶりをこなしている。いかにも京都周辺の地方作にふさわしい感がある。挿図3・附表⑥ 客仏の大日如来坐像は全体に繊細な感じが強く、十二世紀の作と思われるが、各部のまとめ方にやや統一感に欠ける憾みがある。別図Ⅲ10・挿図4・附表⑰ しかしながら都の作風をよく学んでの作といえよう。

佐山の浄安寺には、廃浄福寺の旧仏といわれる観音菩薩立像がある。頭部の小さいプロポーションや、少年のような顔つきなど、康尚時代の特色をそなえているが、やや固肥りの肉身や、三屈法的な身のこなしなど、古像を典拠として造られた感じが強い。秀麗な作風であるが、上半身と下半身との有機的なつながりを欠いた点が

3　阿弥陀如来坐像　称名寺（佐古）

4　大日如来坐像　称名寺（佐古）

5　薬師如来坐像　市田薬師堂（市田）

惜しまれる。（別図Ⅱ4・附表⑦）

三　市田・坊之池・田井

佐古の真北一キロメートル足らずの位置にある市田には、廃護王寺の旧仏三軀があり、現在伊勢田の来迎寺に合併した西福寺跡へ安置され、市田薬師堂と呼ばれている。全体に近世の修理が著しく、かすかに当初の俤をとどめる程度であるが、一木造の構造や坐形の構え、あるいは耳などの細部の表現に古式が認められ、十世紀中葉頃の作と認められる。（挿図5・附表⑥）向かって右壇に安置されている小形の阿弥陀如来坐像は、藤原時代最末期の風が認められるが、肩から肘への張りが大きく、衣文に一種の藤原風でない動きが認められるなど、むしろ十三世紀へ入っての作と考えたい。（挿図6・附表㉙）左壇の阿弥陀如来立像も藤原風を基調としているが、面貌・耳などに生々しさがあり、反面衣

6　阿弥陀如来坐像　市田薬師堂（市田）

文の硬化が著しく、やはり同じような時期の作であろう。

市田の西方、野村を越えて次の集落が坊之池である。観音寺の本尊、小形の阿弥陀如来坐像は、定印を結び、右肩に褊衫をつける。

7　阿弥陀如来立像　市田薬師堂（市田）

8　阿弥陀如来坐像　観音寺（坊之池）

童顔で彫りの浅い衣文表現など基本的には藤原風が感じられるが、玉眼を用い、螺髪部の立ち上りを高く、胸を極端に広闊に表して腰を深く落す体型は大仏風である。十三紀中葉頃の作（挿図8・附表㉑）であろう。

坊之池の南東にある田井の専念寺には、秀麗な安阿弥様の半等身阿弥陀如来立像がある。衣文がやや鎬立って硬化する傾向を除けば、快慶門流の秀作に属する（挿図9・附表㉒）。

9　阿弥陀如来立像　専念寺（田井）

四　下津屋・槇島・小倉・伊勢田

田井の南半粁ほどの位置にある下津屋は、木津川に接した川津としての集落であったと考えられる。迎接（とうしょう）寺の客仏として厨子に納められている菩薩形坐像は、もと室城（むろき）神社の神宮寺に安置されていたもので、明治初年の神仏分離に際してこの神宮寺は取除かれ、寺跡は大正三・四年の木津川改修工事のため跡形もなくなったが、像は当地の迎接寺に移安され、今日に伝えられた。

背面・底面ともに内刳りのないムクの像で、彩色は剝落して素木像のようにみえるが、凹部の随所に白土がみられ、衣の一部には朱が遺っているので、彩色像であったことは疑ない。木寄せで注目さ

れるのは、両腰脇三角材の外側に彫られた天衣の残り方が上方遊離部をも共木で彫った可能性を示していることである。大変珍しい手法であるが、上膊部と三角材とは天衣遊離部を含めて左右ともに各一材で彫られ、頭体部は肩から地付に至るまで縦木三材で完結していたらしい。一木造の風をつよく遺した作風といえよう。

像は胸を張り、腰の据わった堂々たる体型を示し、頭体部の奥行きも充分に深い。顎や胸腹部にみられる肉身のくびれには弾力が感じられ、太い耳輪（じりん）と外へ張る耳朶をもつ大ぶりな耳や、広い足裏をみせる足先などには、部分の強調が顕著にみられる。あるいは九世紀末頃の作かと推測され、この地域での現在知られる最古の作例である。（図版三・別図I-1・附表①）

現在の地理的環境から考えると、このような古像がどうしてこのような辺鄙な集落に伝えられたのか、奇異な感に打たれる。この疑問はすでに冒頭部分で触れたように、近世以前の木津川の利用度を考慮におけばおのずから氷解する。すなわち、木津川が山中から平地へ出る加茂から下流には要所に川津が発達し、そのような背景の中で、神社や神宮寺が営まれ、そこに仏像も安置されてきたのである。二・三の例を上流から下流へと拾ってみよう。まず像内に永承二年（一〇四七）の墨書名がある加茂町の西明寺薬師如来坐像、ついでは九世紀あるいはそれ以前とも考えられる精華町祝園（ほうその）常念寺の菩薩形立像、さらに城陽町枇杷庄阿弥陀寺所蔵でもと天神社薬師院にあった薬師如来立像（九世紀頃）など、何れもその立地条件からみて、川津として発達した郷村に安置されていたものと考えられる。下津屋はこの三例に続くもので、さらにその下流は明治元年までは淀城の南で宇治川と合流していたが、のち男山八幡の北麓へと流れを変えた。古代から近世まで、舟や筏による河川運輸が育んだ村邑の盛衰を背景にして、今日まで伝えられた古像とみることができよう。

宇治市槇島はかって巨椋池の東岸をなしていた地帯で、豊臣秀吉による大改修によって、宇治川が東へ迂回させられるまでは、宇治橋を下って間もなく川筋は東へ折れ、現在の三軒家のあたりで池に注いでいた。妙光寺に客仏として安置されている五軀のうち四軀は、明治初年に約一粁ほど西北の三軒家に近い廃勝福寺より移安されたもので、下津屋の例と同じように、このあたりが河川運輸の要衝として栄えたことと関係づけて考えることができるのかも知れない。

まず薬師如来坐像は等身一木造の古像であるが、近世の表面修理によって原容が著しく損われてしまっている。わずかに体部と両足部とによって多少もとの作風をうかがい知ることができる程度である。両足部は体部に組込式に寄せられ、背面と底から内刳りが施されている。作風はやや粗いが、九世紀末から十世紀前半頃の作と思われる。（挿図10・附表⑧（注4））半等身の十一面観音立像は素木像で、ややぎこちない素朴な彫法ながら、十世紀頃の作風を示している。（別図I-3・附表④）この二例はいずれも地方色が濃いのに対し、以下の二例はそれぞれに当時の中央の洗煉された作風を示している。阿弥陀如来坐像は、左肩より外側、背板、右腰脇三角材などがすべて後補で、修理部分が多いが、主要な部分はよく遺っている。全体に小さくまとまった感じはあるが、比例よく整い、衣文の流れもよく整理され、定朝仏の様風を示す作例の中でもかなり秀れた例である。（別図II-7・挿図11・附表⑩）薬師如来坐像は、写実的な作風をもとに繊細にまとめ上げられたもので、細部にわたって湛慶作と想定される高知雪蹊寺の薬師如来坐像（半丈六）に近い。両足を衣で完

全につつみ、条線的な繊細な衣文を配するあたりもよく似ている。おそらく同一の作者を考えても大過なかろう。肉身の量感の把握はほどよく気品があり、衣文の起伏は変化をもたせながら浅くおだやかに流れ、全体の整いはいかにも湛慶の作風を感じさせる。（図版五・別図Ⅳ13・挿図12・附表㉙）

以上の四軀はいずれも廃勝福寺の旧仏であるが、これらの他に、

10　薬師如来坐像　妙光寺（槇島）

11　阿弥陀如来坐像　妙光寺（槇島）

12　薬師如来坐像（玉眼嵌入）妙光寺（槇島）

15　毘沙門天立像　地蔵院（小倉）

14　観音菩薩立像　誓澄寺（槇島）

13　阿弥陀如来立像　誓澄寺（槇島）

妙光寺近辺の薬師堂に祀られていた薬師如来立像一軀がある。長脊腰高の素朴な作風の像で、体軀はかなり扁平である。眼・口などに彫り直しはあるが、いかにも十世紀末頃のこの土地にふさわしい作風を示している。別図I-2・表⑧

同じく槇島の誓澄寺には、十二世紀の作と思われる二軀の半等身像があり、いずれも都の作風を示している。その一は阿弥陀如来立像で、細かい螺髪や下半身の静かなまとめ方など藤原末期風であるが、男性的な強い感じの顔つきと腹部衣文の起伏に変化をもたせた表現など、十二世紀後半頃の作と考えられる。別図IV-12・挿図13・附表⑭ その二は観音菩薩立像で、円満優美な面貌と腰を左にひねって右足を浮かせ、やや前ごごみに膝に弾力をもたせて立つしなやかな姿は、なかなかの美作である。別図IV-11・挿図14・附表⑬

巨椋神社の境域に接する小倉の地蔵院には十三世紀頃の作と思わ

16　阿弥陀如来立像　来迎寺（伊勢田）

れる毘沙門天像がある。頭部はすべて後補であるが、宋風の練物を胸甲と甲の裾飾に用いている点が珍しい。[挿図15・附表⑲]

伊勢田来迎寺の阿弥陀如来立像は、もと久御山町市田の西福寺の像で、明治十二年の合併に際して移安されたものである。典型的な藤原末期の作で、十二世紀中葉頃の作であろう。[挿図16・附表⑱]

四

以上はまだ中間報告の段階で、久御山東一口の安養寺、相島の光明寺、田井の廃称名寺、市田の毘沙門堂など、今後調査を続けるべき寺院がかなりのこっている。とりあえず短期間の駈け足調査の概要を記し、不備な点は今後の補訂に俟つこととしたい。

なお今回の調査に際しては関係各寺院ならびに檀徒各位、久御山町教育委員会、宇治市教育委員会などの手厚い御協力を得た。心から御礼申し上げたい。

〈注〉

1　巨椋池とその周辺については、『巨椋池干拓誌』（巨椋池土地改良区編・昭和37年）および『宇治市史』1～4（宇治市役所・昭和48年～53年）などに詳しい。近世河川の様子については『淀川両岸一覧・宇治川両岸一覧』（暁晴翁著・松川半山画、柳原書店・昭和53年）が参考になる。

2　『久御山町の社寺』（久御山郷土史会・昭和51年9月）の末尾に全文が掲げられている。

3　森一修「雙栗神社と三郷山」（『郷土』第3集昭和52年3月）

4　井上正「雙栗神社とその周辺」――京畿仏像抄③――（『日本美術工芸』・414　昭和48年3月）

17　妙光寺　薬師如来坐像
方座側板墨書

5　本像の方座裏には二種の墨書銘がある。

(1)〔桟〕京都寺町松原上ル□町／大仏師作者細山八郎右衛門

(2)〔左右側板〕

(a)　かせふきてたほるゝ人はほむらじの／ほねかいでしのうちのどおにて

とき〳〵ニたいこおうつは□んざめ□／しりのとかりにたいこうつへし

(q)　あや／あや／たんたん／ひいけゝちり／かたし／かたし／あ㋐たする事／かたし

きんたん／たん／かたし／きんたん／かたし

いつきさん／ほむらじ／一むらざいに／兴 天 ⿱𠂉丷

(1)は台座新造の際のもので、阿弥陀如来坐像の膝裏に記された享保二年（一七一七）と同時のものかも知れない。

(2)側板のうち一枚には、太鼓橋を中心に、鳥刺し、魚釣り、塔の頂辺などが描き込まれ、宇治橋附近の情景が表されているものと推定される。文字の中には「うちのどお」（宇治の堂）、「きんだんかたし」（禁断難し、または固し）と読める部分があり、『雍州府志』の次の一文が思い合わされる。

「槇木嶋（まきのしま）、宇治川の西に在り。古へ、土人網を下し、或は網代（あじろ）を設け魚を漁（すなど）るを業とす。竹を編て河を遮（さへぎ）り、網に代て魚を取る。是を

網代と謂ふ。興正菩薩叡尊、殺生の罪を憐み、土人をして布を河水に曝すを数へ、是を作業とし、魚を取ることを止む。遂に網代をして宇治川の中島に埋ましめ、塔を其上に建て供養を修す。其塔今宇治橋の南、河の中島に在り。」（原文漢文）

この部分については林屋辰三郎・中野玄三・切畑健などの諸氏の御教示を得た。『宇治市史』2（宇治市役所・昭和49年4月）一四九～一六二頁参照。落書は中世期のものか。

附表「旧巨椋池周辺の仏像」一覧

＊配列はおおむね年代順とした

番号	名称	所在	像高cm	品質	構造・技法	後補・欠失箇所	伝来	備考
①	菩薩形坐像	迎接寺（久御山町下津屋）	77・6	木造・彩色	ヒノキ、一木造。彫眼。頭体の主部は縦木一材、両足部は横木一材で、腹下に組込式に寄せる。両手は肩・肘で矧ぎ、両腰脇三角材は縦木を用い、上膊・天衣遊離部・腰脇材は左右それぞれに共木である。裳先、背面凸部各別材。全身ムクで内刳りはない。〔彩色〕下地の白土、衣の朱がわずかに遺る。	〔後補〕両手の肘より先（左手は肘につながる上膊外側を含む）、正面下腹部のマチ材、裳先、地付の前後に当て板、白毫、金銅製宝冠、同胸飾。〔欠失〕天衣遊離部、持物。	明治初年、近くの室城神社神宮寺（廃）より移安。	寺伝によれば観音菩薩。ただし化仏の痕跡は確認できない。9C.末頃か。
②	薬師如来坐像	妙光寺（宇治市槇島）	82・2	木造・古色	材質不明。一木造。螺髪刻出。彫眼。頭体の主部は縦木一材、両足部は横木一材で組込式に寄せる。頸部以下を背面・底面より内刳り。左方に縦木（肩～地付）一材を寄せる。左袖は横一材。	〔後補〕肉髻上半部、右肩より先のすべて、左手首先、白毫（木製）。表面のすべて。〔欠失〕裳先、肉髻珠。	明治初年勝福寺（廃）より移安。	9C.後半～10C.前半頃か。（方座内側の古材部に、宇治川近辺を描いたと思われる墨描戯画と墨書がある）
③	薬師如来立像	妙光寺（宇治市槇島）	157・0	木造・古色	ヒノキ、一木造。螺髪刻出。内刳りなし。両手首先・両袖先部・両足先はそれぞれ各別材。	〔後補〕右耳のすべて、鼻先部、両手首先、両足先。両袖口部小修理。全面古色。眼・口など彫り直し。後頭部に焼け焦げ。白毫（水晶製）、持物。〔欠失〕左耳、肉髻珠。	槇島城（不明）あたりの薬師堂より移安。	10C.後半頃か。
④	十一面観音立像	妙光寺（宇治市槇島）	93・5	木造・素地	ヒノキ、一木造。彫眼。内刳りなし。現状古色。	〔後補〕頭上面のすべて、左右冠帯遊離部、天衣遊離部、右足先、白毫、宝冠、胸飾。〔欠失〕左肘より先、右手第2・3指、左足先。	明治初年勝福寺（廃）より移安。	10C.後半頃か。
⑤	薬師如来坐像	市田薬師堂（久御山町市田）	90・6	木造・漆箔	ヒノキ、一木式。内刳り。螺髪植付。彫眼。頭体の主部は縦木一材、背面は頭部一材、体部左右二材（中央マチ材）をそれぞれ寄せる。体部の両側に縦木（肩～地付）各一材を加える。	〔後補〕螺髪、両袖口、両手、裳先、肉髻珠、白毫珠（水晶製）、薬壺。表面全面修補。	明治初年旧西福寺跡（現在地）へ移安。もと護王寺（廃）の像か。	10C.後半か。

⑥	阿弥陀如来坐像 —定印—	称名寺 (久御山町佐古)	54.6	木造・漆箔 彩色	ヒノキ、一木造。内刳りなし。螺髪刻出。彫眼。頭体の主部は縦木一材、両足部横木一材で、腰脇に小三角材各一を矧ぐ。両肩、左肘外側、右前膊半ばでそれぞれ矧ぐ。	(後補)左袖先部、右腰脇三角材、肉髻珠(水晶製)、白毫(水晶製)。 (欠失)左袖先部。	寺伝によると、天文三年(一五三四)当寺を開いた西誉が、日野の里の民家に伝えられた像を譲り受けて本尊としたものという。	10C.末頃か。
⑦	観音菩薩立像	浄安寺 (久御山町佐山)	143.0	木造・漆箔	ケヤキ、一木造。内刳りなし。彫眼。両足先各別材。地付き中央に柄を設けて立てる。	(後補)天衣遊離部、白毫、両足先。表面漆箔。	浄福寺(廃)観音堂の旧仏で、明暦年中(一六五五～七)に堂とともに浄安寺の有となった。	10C.末～11C.初頃か。
⑧	薬師如来坐像	西林寺 (久御山町林)	142.0	木造・漆箔	ヒノキ、寄木造。内刳り。螺髪刻出。頭体の主部は縦木左右二材を寄せて割り首とし、その左右に幅の狭い縦木(肩～地付)各一材を寄せる。背面は頭部に一材、体部に左右三材をそれぞれ寄せる。左方は縦木(肩～地付)前後二材を寄せ、さらに肘先部に小一材を加える。左袖前膊部は横木一材、左手を挿込む。右方は肩、肘、手首でそれぞれ矧ぎ、腰脇に三角材を寄せる。両足部は横木前後二材、裳先を別に矧ぐ。	(後補)頭頂一部、左手第四指、右手第二指、地付後半部、裳先、薬壺。表面漆箔。	明治初年薬蓮寺(廃)より移安。	11C.前半頃か。昭和三十四年、第二室戸台風で大破、昭和四十五年修理。
⑨	阿弥陀如来坐像 —定印—	西林寺旧蔵 (久御山町林)	152.5	木造・漆箔	ヒノキ、寄木造。内刳り。螺髪彫出。彫眼。頭体の主部は縦木一材、背面は頭部・体部ともに各左右二材を寄せる。左方縦木(肩～地付)前後二材、袖先一材、手首を挿込む。右方は肩、肘、手首でそれぞれ矧ぎ、腰脇に三角材を寄せる。両足部横木三材(中央主材)、両手首一材製。	(後補)背板中央二枚、左袖先部、白毫、裳先。表面漆箔。	明治初年薬蓮寺(廃)より移安。	11C.半ば頃か。昭和三十四年、第二室戸台風で大破、昭和四十五年修理。現在京都国立博物館蔵。
⑩	阿弥陀如来坐像 —定印—	妙光寺 (宇治市槇島)	85.3	木造・漆箔	ヒノキ、寄木造。螺髪彫出。彫眼。頭体の主部は縦木左右二材で、割り首とし、左方に縦木(肩～地付)一材、左袖前膊部と袖口部に各一材をそれぞれ寄せる。右は肩、肘、手首で矧ぎ、両手首一材製。両足部は横木一材で裳先を別に矧ぎ、体部寄りにマチ材を挿む。	(後補)左方肩より先のすべて、背板のすべて、右腰脇三角材、両足部マチ材、裳先、底板、表面古色。	明治初年勝福寺(廃)より移安。	11C.後半頃か。 〔膝裏墨書銘〕 亨保弐年 丁酉正月七日 南無阿弥陀仏
⑪	誕生釈迦仏像	西林寺 (久御山町林)	11.4	銅造	一鋳。ムク。中心部の鉄心は台座下に出る。鍍金の痕跡はない。	(欠失)反花以下。	明治初年薬蓮寺(廃)より移安。	11C.後半頃か。

番号	名称	所在	像高cm	品質	構造・技法	後補・欠損箇所	伝来	備考
⑫	阿弥陀如来坐像 —来迎印—	西林寺旧蔵 (久御山町林)	140・2	木造・漆箔	ヒノキ、寄木造。内刳り。螺髪彫出。彫眼。頭体の主部は左右二材を寄せ、耳後で前後に割矧ぐ。左方は縦木(肩～地付)一材、腹部に薄板二材をそれぞれ矧寄せ、左袖前膊部は一材、左手首を差し込む。右方は肩、肘、手首で矧ぎ、腰脇に三角材を寄せる。両足部は横木三材、裳先を別に矧ぐ。	(後補)右腰脇三角材一部、左方膝奥の一部、白毫。表面漆箔。	明治初年薬蓮寺(廃)より移安。	12C.前半か。昭和三十四年第二室戸台風により大破、昭和四十五年修理。現在京都国立博物館蔵。
⑬	観音菩薩立像	誓澄寺 (宇治市槇島)	98・8	木造・漆箔	ヒノキ、一木造。割矧内刳り。彫眼。頭体を耳後の位置で前後に、三道下で上下に、それぞれ割り矧ぐ。両手は肩、肘、手首で矧ぎ、足先を別に矧ぐ。	(後補)右肩より先のすべて。左は肘より先、両足先、天衣垂下部、宝冠胸飾、持物。	金剛寺(廃)より移安。	12C.の作か。
⑭	阿弥陀如来立像 —来迎印—	誓澄寺 (宇治市槇島)	98・3	木造・漆箔	ヒノキ、寄木造。割矧内刳り。螺髪彫出。肉髻珠、白毫はともに水晶製。耳後の位置で前後に割り矧ぎ、左右各縦一材(肩～袖先)を寄せる。両足先各別材、両手首差込み。	(後補)両手首先、両足先。	宝増寺(廃)より移安。	12C.の作か。
⑮	薬師如来坐像	称名寺 (久御山町佐古)	138・0	木造・漆箔	ヒノキ、寄木造。内刳り。螺髪彫出。彫眼。頭体主部の前面は縦木一材を用い、三道下で割り矧ぎ、体部は左方に前後二材、右方に一材、背面に一材をそれぞれ寄せる。両側と背面との間にマチ材各一を挿む。肩背面に横木一材、右腰脇三角材横木一材。両足部は横木一材で、体部との間にマチ材一を挿む。裳先別材。	(後補)左手首先。	法蓮寺(廃)の旧仏。	12C.後半の作か。重要文化財。
⑯	薬師如来坐像	満願寺 (久御山町林)	103・0	木造・漆箔	ヒノキ、寄木造。内刳り。螺髪彫出。彫眼。頭部左右二材、後頭部小一材、三道下で矧ぎ、体部は前面一材(あるいは左右二材)、背面左右二材を寄せ、左方縦木(肩～地付)一材、右方は肩、肘、手首で矧ぐ。左袖前膊部横木一材、手首差込み。両腰脇各三角材。両足部は横二材を寄せ、裳先は別に二材を矧ぐ。	(後補)肉髻前面材左半分、左手第2～5指、左足踵より右方に数材の小填木あり。底板。肉髻珠、白毫。	伝来不明。明治時代には本尊であったが、現在は客仏。	12C.後半頃か。明治二十七年鑑査状。
⑰	大日如来坐像	称名寺	89・3	木造・漆箔	ヒノキ、一木式。割矧内刳り。彫眼。頭体の主部は縦木一材を用い、耳後の位置で前後に、三道下で上下にそれぞれ割り矧ぐ。両腰脇には各三角材、左右ともに肩、肘、手首で矧ぐ。	(後補)髻のすべて、右腰脇三角材、左胸部の方形当木。銅製宝冠、同釧。(欠失)裳先。	東明寺(廃)旧仏。	12C.後半頃か。

⑱	阿弥陀如来立像 —来迎印—	来迎寺 (宇治市伊勢田)	97.0	木造・漆箔	ヒノキ、一木式。割矧内刳り。螺髪彫出。彫眼。頭体の主部は縦木一材を用い、耳後の位置で前後に割矧ぎ、背中に一枚板を補足する。両側は縦木(肩〜袖先)各一材を寄せる。両手首差込み。	(後補)肉髻珠、鼻のすべて、両耳朶、両手首先、両足先、両足枘。	西福寺(久御山町市田)の旧仏で、明治十二年に移安。	12C.の作か。 (右足枘墨書銘) 西/正保四年/七月廿四日
⑲	毘沙門天立像	地蔵院 (宇治市小倉町寺内三二番地)	97.6	木造・彩色	ヒノキ、寄木造。頭部一材ムク(後補)、体部左右二材矧寄せ、それぞれ側面にて前後割矧。両足差込。左方は肩、肘、手首、右方は肩、手首でそれぞれ矧ぐ。 (甲の腰部に箔地墨描金鎖甲、下衣の表に朱地切金九目入り三重斜格子文、同表縁に緑青地彩色亀甲繋ぎ文、同裏に白地切金石畳文を地とする彩色団花文、同裏縁に丹地ツケタテ花文、袴に白地切金四ツ目亀甲繋ぎ文を地とする彩色団花文(切金二重円入り)などがみえる)	(後補)頭部のすべて、右方背面材、左足差込部のすべて、右足枘、天衣垂下部。持物、胸甲輪宝金具、宝冠。胸甲、甲垂飾などの型押練物は当初か。		13C.の作か。
⑳	薬師如来坐像	妙光寺 (宇治市槇島)	86.6	木造・古色	ヒノキ、寄木造。内刳り。螺髪彫出。玉眼嵌入。頭体の主部は前面縦木一材を用い、三道下で割矧ぎ、後頭部は一材を肩材に載せる。体部背面は左右二材を寄せ、左方に縦木(肩〜地付)一材を寄せる。左袖前膊部は横木一材で左手首を差し込み、右方は肩、肘、手首で矧ぐ。両足部は横木一材、裳先を別に矧ぐ。	(後補)左手指第二・三・四指、裳先。肉髻珠、白毫珠(水晶製)、彫眼。薬壺の下部。表面古色。 (欠失)左手第五指。	明治初年に勝福寺(廃)より移す。	13C.前半の作か。
㉑	阿弥陀如来坐像 —定印—	観音寺 (久御山町坊之池)	48.9	木造・漆箔	ヒノキ、一木式。割矧内刳り。螺髪彫出。玉眼嵌入。頭体の主部は縦木一材を用い、正中線で左右に、三道下で上下にそれぞれ割り矧ぎ、さらに面部を矧ぐ。両袖前膊部、両手各別材。両足部は横木一材で、裳先を別に矧ぐ。	(後補)肉髻珠、像底一部底板(引戸付きの小窓、柄受孔あり)。 (欠失)裳先の前方部。		13C.半ば頃か。
㉒	阿弥陀如来立像 —来迎印—	専念寺 (久御山町田井)	79.2	木造・漆箔	(詳細未調査)			13C.の作か。
㉓	阿弥陀如来立像 —来迎印—	市田薬師堂 (久御山町市田)	70.7	木造・漆箔	ヒノキ、寄木造。内刳り。螺髪彫出。彫眼。頭体の主部は前後二材、前面割首。側面各縦一材(肩〜袖先)。手足各別材。	(後補)両手指先の大部分、左耳朶一部。表面古色。 (欠失)左耳朶。	護王寺(廃)旧仏か。	13C.の作か。
㉔	阿弥陀如来坐像 —来迎印—	市田薬師堂 (久御山町市田)	53.4	木造・漆箔	ヒノキ、一木造。螺髪彫出。彫眼。頭体の主部は縦木一材を用い、背刳りを施す。左袖前膊部一材、左手を差込む。	(後補)底板。表面古色。 (欠失)耳朶、指・裳先の一部。	護王寺(廃)旧仏か。	13C.の作か。